

ギュスターヴ・クールベのりんごの意味

—自画像としての静物画

山柘あおい(慶応義塾大学)

本発表は、19世紀フランスのリアリズムの画家ギュスターヴ・クールベ(1819-1877)がその晩年に描いたりんごの静物について論じ、意味解釈を行うものである。1871年9月、クールベは、パリ・コミューンの最中における政治的活動によって、サント＝ペラジー監獄での禁固6か月の刑を言い渡される。そこでは人物のモデルを使って制作することが許されなかったため、妹によって運ばれた花や果物をモデルに、およそ40点の静物画が描かれた。そのうち、りんごを中心に洋梨、柘榴などによって構成される果物の主題は、画家にとって初めて扱うものであり、ロベール・フェルニエの編纂したカタログ・レゾネによれば28点を数える。

これまで、これらの静物画に関しては、その制作を巡る状況の特殊性について伝記的に論じられることは多かったものの、個々の作品そのものを持つ意味について詳細に検討される機会はほとんど無かった。しかし、クールベ自身がそれを「奇妙な果物の絵」と形容したように、そこには何らかの解釈の余地があるだろう。とりわけ、デン・ハーグ、メスダハ美術館の所蔵する《りんごのある静物》は、背景に描かれた自然や、今にも蠢き出しそうなりんごの異様な大きさとといった表現の点に加え、それが1872年のサロンに提出されたと推測される点においても、特筆すべき作品である。さらに、画中の1871年の年記と「サント＝ペラジー」という書き込みは、作品が実際には出獄後に描かれたと考えられることから、画家自身の手による操作として、その意図が問われなければならない。

セザンヌのりんごについてのメイヤー・シャピロの著名な研究は、伝統的図像体系の範疇を越えた個人的意味解釈の可能性を提示した。クールベのりんごが、それが描かれた状況から、人物の代替としての役割を担っていたことは明白であると考えられる。さらに先行研究において、りんごの傷ついた状態と、画家自身の精神と肉体の状態との間には、ある種の類似関係が指摘されている。つまりクールベはここで、伝統的ヴァニタスにも似た方法で、しかし普遍的概念を示すのではなく、彼自身の生に対する渴望と死に対する恐怖を、投獄という苦痛の記憶とともに描いたのではないだろうか。またこれまで、マックス・ビュションの「クールベはりんごの木が実をつけるように作品を生み出す」という言葉や、当時の風刺画における描写からも、描かれたりんごと画家との同一視がしばしば示唆されてきた。以上の先行研究をふまえた上で、発表者は、りんごの静物とほぼ同時期に制作された魚の静物との関連から、また《傷ついた男》(1844-1854年、オルセー美術館)をはじめとする自画像との比較から、りんごの静物を持つ象徴的意味を浮かび上がらせ、クールベのりんごが画家の精神的自画像として制作された可能性を提示する。